



月刊 部品新聞

2006年3月 第5号

編集・発行 Unit

オリンピックピックの光と陰

4年に1回、17日間の冬季オリンピックが閉幕しました。連日の熱戦で寝不足の方や、普段目にするののない様々な競技の面白さを発見された方も多かったのではないのでしょうか。

オリンピックで勝利することは、他のどのような大会で何度も勝利しても味わうことのできないことでしょう。それゆえに、選手たちはオリンピックに出場するために、そして勝利するために体力、技術、戦術、道具などいろいろな部分に気を遣い、努力を重ねています。

しかし、その努力を一瞬にして無意味なものにしてしまうものがドーピングです。

ドーピング問題

今回も1人の選手がメダルを剥奪、2名の選手の競技参加ができませんでした。そのほかにも血中ヘモグロビン値の異常で12人の選手の出場が保留され、うち8人の競技への参加は認められませんでした。

メダルを剥奪された選手は1ヶ月前にねんざを起し、その際痛み止めを使用した薬の中に禁止物質が含まれていました。初歩的なミスとはいえ禁止物質が含まれていたことは事実です。出場が保留された他

の2名の選手のうち、1人は明らかにドーピングを行っていたようです。もう1人は常飲している発毛剤に禁止物質が含まれており、それによって出場停止となつてしまいました。

発毛剤でオリンピック出場停止になるとは夢にも思わなかったでしょう。

冬季オリンピックは夏季オリンピックと比較してパワー系の種目が少ないせいか、蛋白同化学薬による違反は1件のみでした。

しかし逆にクロスカン トリーやバイアスロンなど持久力が必要とされる種目が多いため、ホルモンと関連物質によるドーピングが以前から目立っています。

EPO (エポ)

特に注目されているのがEPOと呼ばれているものです。

これはエリスロポエチンというホルモンで通常の人体にもあり、全体の80〜90%が腎臓で作られています。

このエリスロポエチン(以下EPO)は骨髄内の赤血球になつてゆく細胞に作用し、その成長を促進させます。

つまり、EPOが産生されれば、赤血球が増加し、持久力の能力が向上するのです。

このEPOの産生を制御している因子は動脈血の酸素分圧です。ですから、高地トレ

ニングを行うと赤血球数が増加し、持久力の能力が伸びるのはこのためです。

持久力系の選手にとつてこのEPOというホルモンは、あと少しの能力の向上を、苦勞してトレーニングすることなく手に入れられることのできる魔法の薬なのです。

このEPOは腎不全の患者に対する薬として処方されています。ですから、手に入れることは難しいことではありません。

ドーピング大国

毎年ドーピングに関しては新しい禁止リストが公表されています。それらは共産圏の国やアメリカなどで開発されていると推測されています。

アメリカを代表するスポーツである大リーグでもこの問題は大きく取り上げられています。

ドーピングを行っていることを広言している人々も少なくない選手もいるようです。

しかし、今年から始まるWBCではドーピング検査が行われる予定です。

ここで陽性となれば2年間の国際試合への参加は禁止されますが、大リーグへの参加は現段階では問題がないようです。

アメリカはこのドーピングの問題に関して、

大リーグだけでなくバスケット、アイスホッケー、サッカーなどのプロスポーツ界と協力して撲滅を図る動きがあるようです。

また、プロレス界もドーピング検査を実施する予定があるようです。

しかしそれと同時にボディビルディングの世界でもこのドーピングに関して意識をしてもらわなければ、本当のドーピングの撲滅ができないのではないのでしょうか。

検査をする側の意識

私の友人でドーピング検査に関わっている人がいます。

ドーピングの検査方法については排尿しているところを検査官が確認するということはメディアで報道されているとおりです。

採尿カップを自分で選択し、採尿。その後自分の手で保存容器に詰め替え、書類に記入するという手順です。

採尿に慣れない選手は恥ずかしいという気持ちもあり、メディアも排尿を検査官に見られながらするということを大げさに報道します。

しかし、選手のレベルが上がっていくと「自分がシロだということ」を証明してくれる大切な行為」と言うことを理解しており、検査官も最初は恥ずかしかったようですが、現在では「自分がこの選手はシロであると言う

ことを証明しなければならぬ」という気持ちで検査に臨んでいるようです。

ドーピングを防ぐ

現在国民体育大会でもオリンピックレベルではないにしろ、ドーピング検査が行われています。

つまり、市民レベルの選手でも検査を受ける機会があるということです。どうせばれないだろうと思つて行っている人もいるかもしれません。

しかし、それを行うことは競技の公平性を逸脱し、自らの健康をも害することです。アンチドーピングに関してはジュニアのうちからしっかりとトレーニングが教育してゆかなければならないのではないのでしょうか。

Unit代表 澤野 博(さわの ひろし)

日本体育大学卒。社会人経験を経て欧州へ留学。乳酸を中心としてトレーニングを幅広く学ぶ。帰国後、部品となって選手を支えるという意味で「Unit」を設立。競技種目、競技レベルを問わずトレーニング指導を中心に活動。医療系国家資格の臨床検査技師の資格を持つ異色のトレーニングコーチ。

ご意見、ご要望、仕事依頼、お問い合わせは下記まで。
0422-34-5055 (Fax 兼用)、090-1999-2845 または unit@mbd.nifty.com

はみだし：政治家も「こぞとばかり」口を出す ならば最初に やつてくれ